

『あきちゃん』

あきちゃんは自分のことを『あきちゃん』という。小さい頃そんな歌があったけど、あきちゃんの場合は三十を超えている。「この伝票、あとであきちゃんに戻してね」、「あきちゃんね、携帯は持たないの」といった具合だ。あきちゃんは二週間前にこの会社に入った。少し遠目で見ると、体付きといい丸い顔にクリクリの目といいキンタロさんを連想してしまふ、あれでおかっぱ頭にしたらなんて考えて。近くに寄ると目に比べて小さい鼻と口が控えめに整っていて、お人形みたいだ。

会社はホダカカートンと言って、シヤレた名前だが早い話段ボール板を加工する段ボール屋だ。従業員は事務員のあきちゃんを入れて五人。酒好き競馬好きのダンさん。年齢は六十過ぎで、後ろから見た頭の形があしたのジョーの丹下段平に似ている。本好きのブンさん。昼休みはたいいてい文庫本を読んでいる。四十半ばで独身。苗字が氷川のマルくん。ボクより一つ下の二十二才で、段ボール業とは別枠の箱折りが専門。予定変更に弱くて、得意なことと不得手なことがちよつと極端だ。

そしてボク。専門学校を出た後三年間バイトで繋いだ。が、半年前全くの偶然から運良くホダカに入社した。駅前の立ち飲み屋であるダンさんの頭に出会い、近くに移って面白がつて飲んでいると、ボクに気付いたダンさんが声を掛けてきた。話が弾み、最近若いのが辞めたから社長に話してやるといふことになった。面接で生まれ故郷の話をするので決まった。ボクも社長も穂高山麓の出身だったのだ。ボクは啓介でケイと呼ばれることになった。メモなどではKだ。

あきちゃんは勤めて三日目、昼休みに工場の休憩所へ降りてきた。事務室に一人きりになってしまふ社長もついでにきた。いつもの通りダンさんはスポーツ新聞を広げ、

ボクはボーっとテレビを眺め、ブンさんは段ボールの山に寝転んで文庫本を読み、マルくんは工場内を歩き回ってゴミを拾い集めている。あきちゃんがテーブルの椅子に座ると、ブンさんとマルくんを除くメンバーであきちゃん中心の輪ができた。話もあきちゃんが中心だったが、いきなりとんでもないことが起きた。入り口にパトカーが停まり、お巡りさんが入ってきたのだ。ボクと同じくらしいの若いいかにも律儀そうなお巡りさんで、前に停めてあるトラックを移動させるようにと言う。段ボール板を運び込んだトラックで、運転手は駅前の方に昼飯を食べに行っている。社長が事情を話しても、これでは緊急車両が通れないからとにかくすぐ動かすようにと聞かない。仕方なくボクが駅前の方へ運転手を捜しに出かけようとすると、あきちゃんが「キーは付いてるかな」と独り言を言って出て行った。皆があっけに取られてついでいくと、あきちゃんはトラックのドアを開けて運転席によじ登り、突き出した右腕の二本の指で輪を作ってしまった。

「ケイちゃん後ろお願い」、「お巡りさん、免許証事務室のバッグにあるからね」

顔も見せず大声を出したかと思うと、トラックは右斜め前方に進み出てすぐにバックを始めた。ボクは慌て何も分らないままにただ「オーライ、オーライ」と叫んだ。そしてボクのオーライとは関係なく、工場内の狭いスペースにすんなり収めてしまった。

「お巡りさん、免許証もってくるね」とあきちゃんがニコツとしながら言うのと、

「い、いや結構、だけど公道を走るときは忘れずに携帯して下さい」お巡りさんは硬い口調でそう言って出て行った。

「ここだって公道なのにね」とあきちゃんが何事もなかったように笑う。

「あきちゃん、大型の免許なんて履歴書になかったじゃない」と社長があきれたように言うのと、

「あきちゃん昔長距離やって腰を痛めて、もう乗ってたくなかったの」あきちゃんはそう言って休憩所へ戻っていった。

「しかし人間わかんないもんだなあ」とダンさんが呟き、入り口ではブンさんとマルくんがきよとんとした顔であきちゃんを待ち構えていた。

次の日の昼休み、あきちゃんはゴミ拾いに余念のないマルくんを声を掛けた。マルくんは仕事も休憩も一人が好きなので、ボクらの方からはめったに声を掛けない。意外にもマルくんはあきちゃんについてきてテーブルについた。あきちゃんは四角い箱の入った買い物袋をテーブルの中央に置いた。皆が注目する中取り出したのは百人一首だった。

「ボーズめぐりしよ」あきちゃんはそう言って字札はしまい、絵札を伏せて三個の山を作った。あきちゃんはマルくんに簡単にやり方を説明し、

「じゃああきちゃんからね」と言っただけで始めた。あきちゃんは皆が一枚めくる毎に「ヒメ」、「ダンノリ」、「フツウノヒト」、「ボーズ」と大きな声を出した。ボクラもまたちまちまそれに乗せられて声を合わせた。そして、またまた誰も予期しないことが起きた。あきちゃんに言われるままに札をめくっていたマルくんが、ヒメやダンノリでは少しも嬉しそうにできなかったのに、ボーズを引き当て皆から「ボーズ」とはやされた途端、「ハゲ！」と叫んで立ち上がり、ぴよんぴよん跳ねながら皆の周り一周したのだ。マルくんのこんな姿を見るのは初めてだったので皆一瞬驚いたが、あきちゃんの大笑いにつられて笑った。そして、何度目かのボーズで、「ハゲ！、ハゲ！」と繰り返しながらダンさんの頭をペロンとなでた。一番面白かったのはダンさんで、向こうで寝転がっ

ていたブンさんも珍しく笑っていた。マルくん同様、誰が勝つかなんて問題ではなく、マルくんがポーズを引き当てることだけが楽しみなゲームになった。マルくんは何回でも繰り返し、ボクらは何回見ても飽きなかった。それから何日かして、あきちゃんが「皆に見せたいものがある」といって、上等そうなビロードの袋に入った箱をテーブルに置いた。昼休みはすっかりテーブルの子に座る習慣のついたマルくんもじっと見つめている。「あきちゃんの宝物よ」と言って慎重な手つきで入っていたものを取り出す。見るからに重厚そうな茶色い木でできていて、あきちゃんの手つきからしてまさしく宝物といった感じだ。

オルゴール？あきちゃんは慎重に箱の底を上にして、ゼンマイを回し始めた。キリキリいう音はこれまた高級そうだ。そんなに巻いて大丈夫？と心配になるくらいあきちゃんは巻き続ける。皆は緊張して見守る。一番熱心に注目しているのはマルくんだ。あきちゃんは箱をそつとテーブルに置きふたを開けた。皆いっせいに宝物の中を覗く。ボクが「ウオーツ」と言うと同様にマルくんも同じように「ウオーツ」と言った。ボクがつばを飲み込むとマルくんもつばを飲み込んだ。

あきちゃんが小さなレバーを操作すると、驚くほどの大きな音で響き渡った。どこかで聞いたことのあるメロディー。ここでまた今までにないことが起きた。段ボールに横たわっていたブンさんがすつくと起き上がり、テーブルに駆け寄ってきたのだ。

「カンパネラ！」今度はブンさんの声が響き渡った。長い一回分が終わるのを待って、あきちゃんが小さな声で話し始めた。

「カンパネラ、この曲フジコ・ヘミングで有名になったけどね、あきちゃんそれよりずっと前から好きだったのよ。小樽のオルゴール館で見つけたの」

特に曲の最後のうねるように流れる箇所は何度聴いても身震いが起きた。二十分以上もの間誰も動くことはなく、終わったあとでブンさんがいつまでも熱心にあきちやんに話しかけていた。

そして週末の金曜日、ボクが大失態を演じてしまった。朝から出張していた社長が退勤時間近くに戻ってきて、作業場のしかるべき場所をきよろきよろしながらボクに声を掛けた。

「ケイ、あれはできてるか」

その瞬間ボクの頭は一瞬にして血の気が失せたのか逆に血が昇りすぎたのか、訳の分らないくらから状態になった。ポケットに手をつ突っ込むまでもなく、朝あきちやんから手渡されたメモを思い出した。『引き出物の7を三百』これをマルくんに伝えそなたのだ。社長とボクのやり取りを見ていたマルくんが素早く反応した。「ザンギョー、アリマセーーン」そう叫んで飛び出でてしまった。

あきちやんがコンビニへ食べるものを買に行き、社長も入れた残るメンバーですぐに取り掛かった。マルくん以外は滅多にやることのない作業だ。ボクはひどく落ち込み、そして悪いことに申し訳ない気持ちを上手く口に出すことができない。ボクは一段と苦しい思いで胸が締め付けられた。

買い物から戻ったあきちやんが皆におにぎりとお茶を配り、僕の隣に座った。あきちやんはスピードを落とす余裕も説明する余裕もないボクの隣で、折り方を一生懸命真似ようとボクの手元を覗き込み、次第に身体がくっついてきた。こともあろうにボクの心臓はドキドキが高まり、凍り付いていた胸がぼかぼか始まった。ボクは皆に悟られてはまずいと必死で恐縮してる風を装った。

一時間位したとき、社長の携帯が鳴った。氷川家かららしい。残業がまだ終わらないようなら今からマルくん

と母親がこちらへ向かうとのことだ。マルくんの家は歩いて五分ほどのところにある。親も姉弟も超優秀な一家で、おまけに母親はボクがボクの中だけで密かにチョウビママと呼ぶ超美人の女性だ。

皆の驚きの目をよそに、マルくんはすんなり席について作業に取り掛かった。あきちゃんは「すごい」と言つてマルくんの隣に移った。マルくんはボクらの二倍のスピードでしかも箱を折る手つきが美しいのだ。

チョウビママの話では、テレビの忍たま乱太郎の主題歌が終わったら『ザンギョー』って言い始めたという。「うちみたいな子が自分のこと以外のこと気に気を回すなんてありえないと思つていたから嬉しくて」

ママはそう言つてボクの隣に座った。そして、ボクの耳元で「ケイちゃん、私にも手伝わせてね」と囁き、さらに続けた「いつもよくしてくれるケイちゃんのおかげ、ありがとね」

頭も胸も混乱続きのボクは「いえ、あきちゃんの」と説明したかったのだけど、目からあふれそうになるのをこらえるので精一杯だった。その後終わるまでの間、マルくんはあきちゃんとの距離を十センチほど保ち続けていた。

そしてその後何日かして、最後のとんでもないことが起きた。昼休みにあきちゃんではなくて、見たことのない若い男が入ってきた。

「やあ、しばらく」挨拶もそこそこに「そこで女の子に会ったんだけど何？」。

あきちゃんだと思ふけど、『女の子』も『何？』もなんと失礼な男だ。

「え、あきちゃん？ここの事務員？驚いたな、あの子ブーゾクにいた子だよ」

そのとたん、段ボールの山からむつくと起き上がったブンさんが、文庫本を握つた左手と右手をドラえもんの

ように握り拳にしてやってきた。それに気付かないで若い男が「ホント驚いちやうね、店でもあきちゃんだったよ」と言った。男の前に回ったブンさんがいきなり右腕を振り上げ、テーブルをドンと叩いた。

「フーゾクの何が悪い！」

男がたじろぐ。

「こ、こえーな、ブンさん、なんなんだよ」「あきちゃんはどうした」「知らねーよ」

ブンさんは走って出て行ってしまった。マルくんが壁際でうずくまり両耳をふさいで「ウーッ、ウーッ」と唸っている。こういう険悪な雰囲気が苦手なのだ。ダンスさんが「マルくん、もう大丈夫だから」となだめ、「ゲン、悪いけど出てってくれ」と若い男に言う。

「じゃ、またあらためてくらあ」男が出て行く。

ゲンというのはボクの前に勤めていた男だ。半年前にここを辞めて、その三カ月後にはコンビニの店長になったと聞いている。

帰り際に社長に呼び止められた。あきちゃんとは連絡が取れず、ブンさんが会社を辞めるとのことだ。そしてはじめて聞かされたのだが、ブンさんは元高校の先生で、自分の受け持っていたクラスから自殺者が出て先生を辞めたのだそうだ。社長が言うように、ブンさんはゲンという若い男に居場所を譲ってやったにちがいない。ブンさんというのはそういう人だ。

その晩ダンさんと駅前例の飲み屋へ行った。

「しかし実にはいい娘だったよな」

ダンさんがとボソツと言った。そして酒が入るとよくやる語りが始まった。『かつてのいい時代』とその頃の『夜の街』を懐かしむ語りだ。その語り口を聞き懐かしむ顔を見ているうちにボクはふと思いついた。ブンさんは先生を続けられなくなった頃、夜の街であきちゃんみたいな女性と出会ったんじゃないか。そう思ったら不

意に、あのときの軽く触れたあきちゃんの肩と腰の温もりがよみがえった。あんな大失態のさなかで、隠すのが大変なくらいボクはときめいた。

そしてダンさんがまた独り言のように呟いた「二人はかけおちしたんだ」

『かけおち』、昔映画か何かであつた。そうか、二人はかけおちしたのか。ボクは動揺した。そして酔いのせいではなく胸が高鳴った。ダンさんがボクの反応に感付いたかこちらに顔を向けた。ボクはあわてて悟られまいとごまかした「ボクも本をもっと読んでもっとまじめに生きてたら、あきちゃんとかけおちできたかなあ」

するとダンさんは「ふん、ふん」と頷いて笑った。ダンさんがいい笑い顔している。馬を当てたときとはまた別の笑い顔だ。ボクはダンさんに気付かれないようにペロンの頭を見てひと笑いし、コップのビールを飲み干した。